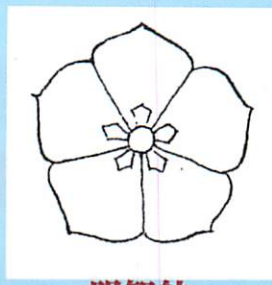


明智



明智紋

光秀

# 明智一族の栄枯盛衰

## 東美濃明智の庄での215年

### 可児郡明智城歴代城主

頼兼

1342年

明智城築城

頼重

頼篤

國篤

頼秋

頼秀

頼弘

光繼

光綱

光秀

1556年

明智城落城

土岐明智次郎 兵庫助 下野守 從五位上  
入道 淨孝 號 下野入道  
本名 頼則 或 頼重 明智家元祖也  
頼兼 美濃國可児郡明智城主

文保元年丁巳三月二日生於池田郡小嶋童名弓五九云母佐々木  
頼綱女也康永元年壬午三月初築城於可児郡明智之里  
居住之因用地名爲氏號主岐明智次郎兵庫助頼兼是了  
明智家之始祖也任將軍尊氏義詮御父子兩公親應元年  
庚寅九月任下野守叙從五位下文和四年賜所領之下文

光秀 家定紋蔭桔梗。替紋丸丹橘

光秀 享祿元年戊子八月十七日生於石津郡多羅羅云云多羅進主家  
居城也或生於明智城共云云母進士長江加賀右衛門尉信連  
女也名美佐保云傳曰光秀實妹智進士山岸勘解由左右  
門尉信周之次男也信周長江信連子也光秀實母光綱之妹  
進士家於濃州弓長江家依領郡上郡長江庄也稱北山之  
豪家云云明智光綱家督相承而取結妻緣后既經八年之  
春秋然共生得病身而不設二子齡及四十一因爲其父光繼  
之賢慮光秀誕生之時其修取迎之爲養子相讓家督因  
光秀成光綱之子然而以叔父兵庫頭光安入道宗叔爲後

光秀 明智十兵衛尉 惟任日向守 山陰道追補使  
西海道藩鎮 丹波侍從 後昇殿  
從三位左近中將 惟任將軍宣下

(史料=東京大学史料編纂所蔵)



# 明智光秀のこと

2020年 NHK 大河ドラマ 「麒麟がくる」

主人公、可児市出身 戦国武将・明智光秀



明智城址碑  
(可児市瀬田)



光秀公肖像  
(内田青虹筆 可児市所蔵)



明智氏菩提寺  
(天龍寺 可児市瀬田)

明智光秀 享禄元年（1528年8月17日）可児郡（現可児市）明智城にて生まれる  
父＝石津郡（現大垣市）多羅 山岸信周  
母＝可児郡（現可児市）明智城第9代城主 光綱の妹 お市の方

お市の方が山岸信周の許に嫁ぎ享禄元年8月 実家明智家の祝い事に招待された折り、急に産気づき次男を出産した。

実家光綱には世継ぎがなく、実父信周・実母お市の方の承諾の上、養子縁組家督を相続させたのが、第10代可児明智城主 明智光秀である。

光秀の妻は妻木（現土岐市）の妻木範熙の娘・於牧の方（ガラシャの実母）であり、弘治2年（1556年9月26日）斎藤義龍の攻略による可児明智城落城まで可児に住まう。  
天正10年（1582年6月13日夜）於城伏見小栗栖生害 55歳

※明智光秀の出自について諸説ありと言われていたがそれは可児か多羅かの説であったが、可児の実家での出産と記された、明智光秀公家譜古文書により解明できた。  
(原籍 多羅、生誕地 可児市)。

(史料)

東京大学史料編纂所 明智氏一族宮城家相伝系図書  
美濃国諸旧記 可児市立図書館所蔵  
安国禅寺文書 田中豊氏所蔵  
明智光秀公家譜古文書 林則夫所蔵  
明智光秀公家譜覚書 林則夫所蔵

可児市史跡・明智城址保存会長 林則夫

(年間行事)

- 1) 昭和48年から毎年6月に明智氏一族の供養祭（天龍寺 可児市瀬田）
- 2) 昭和54年から明智光秀出生太鼓演奏（トキワ幼稚園）
- 3) 昭和60年から明智城夏祭（羽生ヶ丘自治会）
- 4) 近隣自治会保存会員による城址清掃奉仕（羽崎・瀬田・羽生ヶ丘・広眺ヶ丘）